

題目 帰属のエラーと一般的信頼の関連性の検討

氏名 永井舜

指導教員 高橋伸幸

信頼とは、相手の人格や感情についての評価に基づく期待である。他者一般に対する信頼は一般的信頼と呼ばれており、アメリカ人のほうが日本人よりも一般的信頼が高いということが繰り返し指摘されている。信頼の解放理論(山岸, 1998)によると、高信頼者は、他者の信頼性を判断する社会的知性を身につけており、社会的不確実性が高く機会コストの高い社会で、これを活用することによって他者の信頼性を判断して、騙されてしまうリスクを低減している。一方で、低信頼者は機会コストを払いながら、同じ相手とのコミットメント関係を維持することによって社会的不確実性を低減させている。以上のような、高信頼者と低信頼者の特性と原因帰属を関連付けた研究が Ishii(2007)である。この研究では、人々が他人の行動を推測する際に、外的要因の影響を無視して内的に帰属してしまう「帰属の基本的エラー」の文化差が、一般的信頼の文化差によって説明されることを明らかにしている。その理由として Ishii(2007)は、内的帰属することが高信頼者にとって他者の信頼性を判断するうえで重要であるためではないかと述べている。以上のように高信頼者が社会的知性を活用して内的要因を見極めているのであれば、彼らにとって外的要因は「邪魔な」存在であり、無視すべき存在であると考えられる。高信頼者にとっては、信頼の関係する状況で帰属の基本的エラーを起こすことが適応的なのではないだろうか。以上の考えの下、本研究では次の2つの仮説を検討するために質問紙実験を行った。①一般的な状況で外的要因を分かりやすくした場合、日本人よりもアメリカ人のほうが帰属の基本的エラーを起こす程度が高い。そして日米差は、一般的信頼の高低差によって説明される。②信頼の関わる社会的不確実性の高い状況でも帰属の基本的エラーが生じ、アメリカ人のほうが日本人よりもエラーを起こす程度が高い。さらにそれは一般的信頼の高低差によって説明される。分析の結果、一般的状況において帰属の基本的エラーは日米で起きたが、生じた程度に差はなかった。しかし、社会的不確実性の高い状況では仮説とは逆に、アメリカ人のほうが帰属の基本的エラーを起こしにくいことが明らかになった。その差は、一般的信頼によって説明はされなかったが、社会的知性が外的要因をも見抜く力を兼ね備えていることを示唆する結果となった。